

主宰論説 45 旅—人類史における過去・現在・未来
(校正版)

世界史の中で、旅行記を表し、旅行そのものの楽しみや、旅行を通じて、見たり、会ったり、感じたり、考えたり、聞いたことを、見聞録、紀行文、あるいは旅行記として伝えた人達は、多いようであって、それほど多くないようだ。最初に思いつくのは、史上最も偉大な旅行家の一人であると知られる、モロッコ人のイブン・バットゥータである。彼の旅行記『諸都市の新奇さと旅の驚異に関する観察者たちへの贈り物』（通称：リフタ）にまとめられた広範にわたる旅行で知られ、30年間をかけ、既知のイスラム世界、そして非イスラムの地を旅した。彼の旅した地には北アフリカ、アフリカの角、西アフリカ、東ヨーロッパ、南アジア、中東、中央アジア、東南アジア、中国が含まれる。（スペイン語による翻訳文が発刊されてから、世に広く知られるようになったようだ）。他方、1,300年頃、当時のモンゴル帝国内で、シルクロードを介した東洋の事情を西洋に紹介したマルコ・ポーロの『東方見聞録』が、よく知られている。他に、1,406年には、ルイ・ゴンザレル・デ・クラヴィオが、『ティムール紀行』で、モンゴル帝国の後継国家のひとつティムール朝の紹介を行った。これらの旅紀行が、大航海時代に、マゼラン、コロンブス、コルテスらの探検家が、未踏の新しいアジアやアメリカを目指す原動力となったようである。

中国側からの旅行記としては、先駆的なものは、東晋時代の法顕が、オアシス地帯を経由してインドに赴き、著した『仏国記』が、上げられる。唐代では、玄奘と義浄の旅行記が有る。『大唐西域記』は、玄奘（三蔵法師）が、当時の唐の都長安（現代：西安）から、タクラマカン砂漠のオアシス地帯を経由して、当時の西北インド地方（天竺）まで旅をした後、沢山の仏典を持ち帰ったが、旅行中に見聞きしたものを後述し、それを弟子の弁機が、筆録したもので、全12巻にもなる。（約40年前、第2回エコマテリアル国際会議が、西安で開催されたとき、大雁塔に上り、はるかインドに思いを巡らしながら、俳句をしたため、『西安探訪記』という紀行文をまとめたことがあった。大雁塔は、玄奘が持ち帰った仏典を所蔵していたらしい。）

また、義浄は、『南海寄帰内法伝』および『大唐西域求法高僧伝』を著した。彼は、海路でインドには西暦673年に到着し、14年間インドに滞在し、そのうち10年間は、ナーランダー僧院で過ごした。帰路も再び海路で、シュリーヴィジャヤ王国を経て、695年帰国。25年間に30余国を遊歴し、400部、50万頌のサンスクリットの経律論、金剛座、舍利300粒などを齎した。

日本に目を向けたとき、最初に浮かぶのは、平安時代に成立した日本最古の旅日記と言われる、紀貫之が著した『土佐日記』である。土佐（現在の高知県）から京都に帰る最中に起きた出来事を、諧謔を交えて綴った日記の形態の紀行文の内容を持つ。成立時期は、定かでないが、934年（承平5年）と言われる。その後は、時代は遙かに下って、江戸時代の元禄期に、松尾芭蕉が著した『奥の細道』がある。日本の古典の中で、紀行文形式の旅を主題とした代表的文学と言われる。奥州から北陸地方等の名所・旧跡を訪れながら、その時の風情や、感じたことをもとに、『俳句』の形で締めている。

これらの東西の旅文学は、通常の物語的文学とは別に、人々の夢とロマンをかき立て、人的・文化的交流の源になり、世界史に大きな影響を持ったものと言える。ジュール・ベルヌのSF大傑作である『海底2万マイル』や、マーク・トウェインの『トム・ソーヤーの冒険』などの探検を扱った文学小説は、あるが、実体験を基にした紀行文や旅行記は、少ないと考えられる。

手前みそで申し訳ないが、福島敏夫は、最近の約45年間、世界のいろいろな国で行われた国際会議を通じて、いろいろな国・都市を訪れ、その時、見たり、聞いたり、感じたり、考えたことを、紀行文として、まとめ続けた。また、日本の学会・研究会・シンポジウム等を通じて訪れた日本各地の名所・旧跡についての紀行文をまとめ続けた。これらは、福島敏夫随筆集「乙戸南

雑話『花鳥風月および星・虹を愛でながら』の中で、まとめられている。

昔と違い、今は、自動車、鉄道、船、飛行機等の輸送手段が発達しているし、宇宙旅行も視野に入りつつある。今後、旅行記は、かなり変わった形態で、進展するのかもしれない。いずれにせよ、知的好奇心に基づく、虹の彼方の異郷のもの、異文化への理解と受け入れの精神が、文化交流と経済振興の源になるように考えられる。

2025 年 9 月 23 日秋分の日 初稿

2025 年 9 月 24 日夕方再校

2025 年 9 月 26 日正午修正

2026年10月10日夕方校正